



発行日 平成二十八年一月一日 第二十六号

【法語】

「わかきとき、仏法はたしなめ」と、候う。
 「としよれば、行歩もかなわず、
 ねむたくもあるなり。」
 ただ、わかきとき、たしなめ」と、候う。

蓮如上人御一代記聞書 六三

【意識】

仏法に深く帰依した人が、
 「若いときに、仏法を聞き、親しみなさい」と、
 言われました。
 「年をとれば、法座へ歩いていくこともままならず、
 法話を聞いていても眠くなることもありませう。
 だから、少しでも若いうちに心がけて聞きなさい。」
 と言われました。

*人間は一日一日老いていきます。明日の自分より今日の自分が若いのです。「若きとき」とは「今」です！

2015 年後半写真展



年末法話会 ↑ →



↑ →
 しまい講
 報恩講参りの旅
 ↓



☆巻頭法話『年頭にあたり』☆

一年の過ぎる早さにただ驚くばかりですが、それも一年という月日は自分の心に多くの事を刻みつけるものです。昨年も沢山の有縁の方々とお別れせねばなりません。若い頃から大変お世話になった方、お寺を通して深い関りがあった方、様々な関係性の中で、死という現実が、誰もが避けて通ることのできないものと言う、「いのち」の姿を改めて思い知らされるものでした。諸行無常とは仏教が教える真実です。どんなにお元気な方であっても、やがて年齢を重ね、病を得、いのちを終えていく。それは、その方々が身を賭して残った私どもに教えてくださったっている身の事実にあります。最近そのことが伝わりにくくなっているように思います。

境内にある大櫨は、樹齢400年位にもなっていると思われませんが、私が物心ついた頃から四季を通じて毎年同じ姿を見せてくれます。春には誕生した新しい生命のように初々しい新芽を一面に付け、やがて美しい若者の姿のような新緑の季節を迎え、屈強な壮年時代を思わせるほどの濃い緑葉が生い茂り、秋を迎えると共にその色を紅色に変え、冬の足音と共に一枚、また一枚と散り落ちてやがて何も無い枝だけが残る。まさに人間の一生を思わせる姿を見せてくれるのです。毎年晩秋に櫨の葉を箒で掃きながら、これで今年の櫨

の一生が終わったのだという思いがしていました。ところが今年、思わぬお声をかけていただきました。落葉した櫨の葉を福島へ持って行ってくださるというのです。除染した土壌の新たな土造りに使いたいというお話でした。今まで、集めた葉はゴミ袋に入れて捨てていただけでしたが、このお話をいただいて、散っていった葉がまた新しいいのちとなって働くことができるということを知りました。それと同時に、人のいのちがこの娑婆世界で終わったとしても、残った私たちに仏様として浄土の世界から働いていてくださるのだという思いを新たにしたところでした。私たちは亡き方を本当に仏様としていただく生活ができているのでしょうか。亡き方が我が身を通して私たちに問いかけて下さっていることを、有縁の人達が皆それぞれにいただいているということは、いのちの繋がりとという意味では大変重要なことだと考えます。近年、葬儀の姿も様子が変わってきました。商業ベースに乗って必要以上に過大に行うことが見直されてきたこととは良いことだと思いますが、亡き方の様々な繋がりが、ある日突然途切れてしまうことには残念な思いがすることがあります。亡き方からのいのちの姿を学び、亡き方を仏様としていただき、自らのいのちの糧としていくのは、生前親しくしていただいた者にとっては大切な仏縁であるはずですが、最近では亡くなったことさえ知らされず、後で風の便りで聞いて寂しかった

というような話を聞かされますし、自分もそういう思いをしたことがあります。多くの有縁の方々繋がって生きているこの社会の中で、一生を終えていった人をどのような形でお送りするのが良いのか、難しい問題です。皆さんはいかがお考えになるでしょうか。無縁社会という言葉は、単に単身世帯が増えたことよって生じた社会ではなく、私たちが作り出している社会でもあります。本年も皆様と共に「いのち」の問題について聴聞して参りたいと存じますのでよろしくお願ひ申し上げます。

合掌

（住職）

☆住職より・・・

「真宗講座（推進員養成講座）が開催されています」

三条教区第十組の重点事業として、真宗講座（推進員養成講座）が開催されています。推進員養成講座とは、ご門徒の方々を対象に、真宗の教えに学びながら、日頃の思いを語り合い、真宗門徒としての生活を深め、聞法の輪を広げていく講座です。全六回の講座で、第一回から第五回までは三条別院を含めた地元のお寺を会場に講座が開かれ、第六回目は京都東本願寺へ行きます。今回、浄敬寺からは三名の方が受講されています。三年に一度開催される講座です。今回は是非皆さんも参加してください。

☆庫裡便り（坊守）

◎ほんざんじ念願の坂東曲に遇わせていただきました

十時から始まる坂東曲を前方でお参りするために朝五時の開門に並びました。坂東曲は東本願寺のみに伝えられている声明で、聖人の祥月命日（十一月二十八日）の年に一度だけ勤められます。内陣からの導唱の後、下陣に座した五十数名の僧侶が、鍛錬された声で、体を揺すりながら勤める坂東曲。その響きの素晴らしさ、体の芯まで届くような声明に感動し、自然と頭が下がり手が合わさりました。遠い京都の本山まで、ご一緒に参詣してくださった御門徒の皆様には感謝の気持ちでいっぱいでした。

坂東曲が始まる頃には、本堂の外まで参詣者であふれていました。出版部に勤務中の娘も開門と同時に動員され、記録係としてお手伝いをしておりました。

◎次女千晶のこと

次女千晶は、新潟大学卒業後、新潟の芸文（りゅーとぴあ）の劇団にて演劇をしておりましたが、四年程前に文学座の研究所に入り、今年度からは準座員として在籍しています。

この度、『スターウオーズ』『フォースの覚醒』の日本語吹替え版にヒロイン・レイ役として、声だけ出演しています。演劇の夢に向かって本人なりに努力しながら、歩んでいるようです。

今後は、三月十二～二十一日、新宿紀伊国屋ホールでの文学座本公演「春疾風（はやく）」に出演予定です。



☆二〇一五年後半を振り返って

◎秋彼岸（お中日九月二十三日）法話 准坊守・晴香

私たちが阿弥陀様のはたらきに会い、お念仏を申す人になっていくこと、その因果の話を植物の種（因）が土や水や空気などの様々な外因（縁）があつて、花を咲かせたり実をつけたりする（果）の過程にたとえて、お話させていただきました。准坊守・晴香が、どうして今ここに、法衣をつけて立っているかということ、父母・祖父母・御門徒の皆様、そして決定打を与えてくださった師のことお話させていただきました。

毎年、春分の日と秋分の日が彼岸の中日です。お申し込みは不要ですので、ぜひお参りください。

◎三条別院報恩講お取り越し 団参（十一月六日）

祖父江佳乃師の節壇説教、御伝鈔の下巻を拝聴しました。伝統的な節壇説教ですが、女性のお声で聞かせていただくことが新鮮でもあり、お話のテンポのよさに引き込まれました。御伝鈔は親鸞聖人の御一代記で、拝読方法をはじめ、御伝鈔の入った箱を運ぶ練り出し等も、伝統的に受け継がれた儀式作法です。別院の大きな御堂での報恩講独特のお勤めに遇っていただくことができたのではないのでしょうか。准坊守・晴香も、外陣のお勤めに出直し、御文の拝読をさせていただきました。

◎しまい講（十一月二十二日）法話 住職

本山の報恩講参りが予定されていたため、例年より一週早めのお講でしたが、たくさんの方からお参りいただき、ありがとうございました。

「私たちは、自分の真実の姿を見失い、自分の思いを満たすことに終始しているのが現実ですが、そんな私たちに、阿弥陀様はその姿に気づけとご催促してくださっています。そして阿弥陀様は、そのことになかなか気づげない私たちに、決して諦めることなく、いつ

でも、どこでも、はたらきかけ続けてくださっているのです。そのはたらきかけを知るためにも、聞法のスイッチを入れ続けていかなければなりません。これからも聞法の歩みを続けていきたいものです。」と、住職からの法話に引き続き勤行があり、おときは下原地区の皆様からお当番をしていただき、無事に今年最後のお講を勤めることができました。

◎年末法話会（十二月十三日）法話 田澤 一明 師

現在日本は世界でも有数の長寿国として知られています。私たち自身も当然のように長寿を望んでいます。しかし、長寿を望みながらも、社会生活において経済、介護などの問題を新たに作り出しています。そのように、私たちの行動とは、良かれと思つた行動においても、結果として必ず新たな問題を引き起こすという矛盾をはらんでいます。この事実から分かることは、私たちの願望によって構築しようとする世界がどこまで行っても流転する世界であるということなのです。その世界の中には、自分の都合で人を選び・嫌い・見捨てる行動しかないということです。

そのことを気づかせてくれる教えが真宗であり、その教えの根本には、選ばず・嫌わず・見捨てない国、お浄土に生まれて欲しいという阿弥陀如来の本願がつらぬいている。長寿であることを問題にしている社会が問題なのだということを指し示す本願が南無阿弥陀仏のお念仏であります。そんな社会だからこそ、それを明らかにする真宗の教えが大切な教えだと思ふのです。

（ 当院 記 ）



十一月二十六〜二十八日

真宗本廟報恩講参拝の旅 旅行記&写真

【一日目】

・大谷祖廟にて参拝、納骨、その後、知恩院の高い階段を登って除夜の鐘で有名なつり鐘を見学。

【二日目】

・紅葉の名所、永観堂へ、みかえり阿弥陀如来にお会いする。
・嵐山方面では天龍寺の庭園を見て、竹林を歩く。
・嵯峨野の奥、あだし野の念佛寺へ、沢山の石佛をお参り。
・金閣寺は外国の方も多く大変混雑だったが、夕陽に照らされる美しい金閣寺がみられる。

【三日目】

・朝四時起床、五時の開門を待って門前に並ぶ、まだ真っ暗、月がきれいに出ていた。
前から五〜六列目に全員陣取り、六時半から始まるおあさじを待つ、七時から二班に分かれて朝食をいただきに宿へ。
修復途中の阿弥陀堂を見学して、十時からの坂東曲のお勤めを待つ。二時間の坂東曲のお勤めをお参りし、昼食後帰路へ。



☆ご参加の皆様、ありがとうございました☆

☆二〇一六年前半の行事予定

一月一日

修正会勤行

朝六時より

一月一～二日

年始参

*真宗門徒の一年は、御本尊のお参りから始めましょう

一月十六日(土)

正信偈をよむ会

午前九時～

二月十三日(土)

正信偈をよむ会

午前九時～

三月十二日(土)

柏刈同朋会報恩講(産業文化会館)

午後一時三十分～

三月十七～二十三日

春彼岸

*お中日 二十日(春分の日)

午前十時半～法話・勤行後・おとき

四月九日(土)

正信偈をよむ会

午前九時～

五月十九日(木)

報恩講お引き上げ 午前十時～

法話(今泉 温資 師)

引き続き 勤行(御満座)・おとき

六月十一日(土)

正信偈をよむ会

午前九時～

六月二十五日(土) 夏の法話会 午後一時半～

七月二日(土)

十組仏教文化講演会(アルフォーレ)

七月十四日(木)

盆参会(盆内) 両日とも十時半～

十五日(金)

法話・勤行・おときがあります

八月七日(日)

夏休み子供の集い 午後四時より

八月十三日～十六日

盂蘭盆会(お盆)

十三日・・・午前六時より 本堂にて勤行

定例会『正信偈をよむ会』ご案内

*日時 第二土曜日午前九時より

*内容 『正信偈』の解説や読方、御文拝読

終了後、自由参加で茶話会あり

*持ち物 赤本 念珠

基本的に第二土曜日に開催しておりますが、教区や組の行事との関係で、変更の月があります。ご確認ください。

☆第二十四回 晴香の『真宗門徒のマメ知識』

今回のテーマは『葬儀①〜葬儀前の行事〜』です。

以前にも葬儀について解説したことがありましたが、宗派が告示した葬儀の諸式（一九七二年発行）に基づいて、柏崎の風習も交えながら、大切にしたいことや「へえ〜」という豆知識を連載します。

☆葬儀前の行事

①ご臨終

縁ある方への連絡は勿論ですが、早い段階で寺の住職へ連絡し、枕勤めから葬儀に至る日程の確認をお願いします。近年は病院から帰宅される場合が多いかと思えます。自家用車でご遺体を運ぶことも法的には問題ありませんが、その場合、医師が書いた死亡診断書を持参してないと殺人事件や死体遺棄と疑われる可能性も……。柏崎の現況は、ストレッチャーを搭載した車を手配するのが一般的なようです。葬儀社が決まっていればそこを通じて手配してもらえますし、病院からもタクシー業者などを紹介してもらえます。

②お内仏・枕飾り

真宗門徒の葬儀は、必ず御本尊を中心に勤めます。ご遺体はお内仏の間に安置し、お内仏は灯明を点じ、花瓶には密（しきみ）を挿します。お内仏の扉は葬儀が終わるまでは閉じません。
*通常、お内仏の扉は朝の勤行前に開き夕方に閉じます。花瓶には色花です

ご遺体の枕辺には小机を設置し、香炉と燭台をおきます。香炉には香を燃じて絶やさないうようにします。これを「不断香（ふだんこう）」といいます。近年よく目にする、渦巻き方のお線香はこのために作られたものです。

お内仏のない場合は、御本尊（名号軸）をお掛けするか、三折御本尊を安置します。寺からお貸しします。



香炉

燭台

ちょっと解説!

③枕勤め（枕経）

住職が伺い、ご家族・近親者と共にお勤めします。宗門から出版された本には「住職にお願ひし、帰敬式を受式してない場合は、この時に法名をいたたく」とあります。現在の新潟県内では、生前に法名をいただいていない方には、葬儀の読経前に略儀的に帰敬式を行う風習となつていますので、法名は通夜の際に法名板（位牌）に記したものをお持ちしています。

*位牌は基本的に用いませんが、通夜葬儀の際に便宜上使用します

③納棺

ご希望があれば、住職または住職の代理が伺いますが、現在は業者の方とご家族で行われることが多いです。草鞋や杖のような死装束は用いず、お金を入れる必要もありません。名号・法名・命終年月日・俗名などを記した「棺書（かんじょ）」を棺に入れます。これは地方色があるようで、浄敬寺では通夜または葬儀で帰敬式を執行した際に棺にお入れしています。

☆最後に

葬儀のことを書くこうと思ったのは、昨年の御門徒の葬儀でお聞きした弔辞に影響を受けたからです。故人のお孫さんが読まれた弔辞でした。幼い頃からの思い出と感謝の言葉をしっかりと述べられ、最後に「おじいちゃんがいって、お父さんお母さんがいて、私がいいます。そのことを忘れずにこれからも一生懸命に生きていきます」と言われました。二十歳のお孫さんが読まれたこの弔辞は、今までに聞いたどんなものよりもシンプルでしたが、筋が通っていました。「安らかに眠りください」と言いながら、「私たちを守ってください」などと、どっちですか？と突っ込みたくなるようなことを言ってしまうのが私たちの常の姿です。御本尊の元でお勤めする『南無阿弥陀仏の葬儀』の意味を、再確認したいと思った出来事でした。葬儀の話、次回へ続きます。

最近、次男が気に入らないことがあると、親であろうとお構いなしに「馬鹿！」といます。外で覚えてきたと思いたいところですが、私も使った覚えがあるので言われるのは自業自得です。二歳の三男はよく「コラー」といいます。これにも覚えがあります。いずれ覚える言葉とは思いつつも、言われると嫌なものです。馬鹿の語源は二つあります。

一つは古代中国の逸話によるものです。中国の秦の趙高しん ちょうこうが鹿を見せて家臣にこれは馬だといひ、馬ですと答えた家臣はとがめず、鹿だと正直にいった家臣を敵対しているとみなし捕えたそうです。機転を利かせて鹿を馬と云って難を逃れた賢い家臣を馬鹿と云ったそうです。今とは逆の意味だったようです。

二つには仏教で慕何ほか (Moha) という言葉です。意味はお釈迦様のお話を何遍聞いても真剣に耳を傾けず、頷けない人のことです。このことを考えますと私が次男の言葉に耳を傾けないので馬鹿なのかと思います、これからは注意しようと思えます。三男の「コラー！」については未だ分析中です。

(当院)



☆編集を終えて：

年末、我が家にスターウォーズブームが到来。かつての作品も見返しています。

『仏教』の根本原理に、「諸行無常(あらゆることは移り変わる)」「諸法無我(あらゆるものには実体がない)」があります。スターウォーズの登場人物のセリフに、「フォースはあらゆるところに存在する。生きとし生けるものすべてに、目に見えないものの中にも全てに・・・」という興味深いものがありました。仏教の言葉でこの存在を言い換えれば、「無量寿(はかりしれないのち)」でしょうか。勿論、ライトセーバーのような武器には変化しません、不殺生戒がありますから。

私たちは、他の生物や植物の命を奪い、自らの命を繋いでいるわけですが、パックに詰められ、切り身になって並んだ肉や魚ばかり見ていますので、我が身の罪深さを知る機会を失っています。爆弾が降ってくる恐怖の中で新しい年を迎えなければならぬ人たちがいることも、帰る家がない人がいることも、想像しがたいことかもしれません。巨匠ジョージ・ルーカスの想像力に触れ、今世の中で起きていることがどういうことなのか、私たちも想像力を大いに働かせて、未来を選択していききたいと思いつつ新年を迎えています。

(晴香)

☆メールアドレス

住職 tom814@kismet.or.jp 晴香 haru310@kismet.or.jp
当院 minipapa@kismet.or.jp

☆ブログ

『真宗大谷派浄敬寺 小僧☆はるかの気まぐれ日記』

http://blogs.yahoo.co.jp/haru_0310_naga